

ルールをつくる上で何を大切にするか、学び合う中で社会の見方・考え方を高める子ども

— 中学3年生「社会生活とわたしたちの暮らし」の実践から —

1 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

中学3年生の公民的分野の学習は、私たちが生きる現代社会と文化について学習することからはじまり、グローバル化や情報社会、少子高齢化の進展等を通じて、多様な価値観が尊重される自由で民主的な現代社会の特色を概観してきた。それは古くからの地縁的、血縁的関係の強かった日本社会の中に、「個」を尊重する社会の到来とそれに伴う問題や自己責任の増大を、生徒たちに想起させたといえよう。多様な価値観や利害関係が複雑に絡み合った現代の社会では、競争や対立が多く生まれている。

以下は、公民学習の導入単元である「現代社会の歩みと私たちの生活」の学習で、現代社会のなかで生徒が課題をさがし、各自でテーマを設定し、調べ学習をおこなった後のふりかえりである。様々なテーマがみられたが、以下はエネルギーと原子力発電に関して調べた生徒のふりかえりである。

○今年3月に起こった東日本大震災で、日本では原子力発電のデメリットばかりさわがれていますが、今回の調べ学習で、原発には確かにデメリットもあるけど、メリットも存在していることがわかりました。二酸化炭素を排出しないことや、電力供給が安定している点、地域への手当などです。今、世界では、原子力発電停止運動がさかんに行われている国もありますが、大切なのはデメリットを責めるばかりでなく、原子力発電が生み出してきたメリットも認めることだと思います。今や日本の電力の30%をまかなっている原子力発電の必要性を知った上で、安全性などの問題をみんなで考え、今後の原子力発電をどうすべきか決めていくべきだと思います。(生徒A)

○調べてみると、火力発電より原子力発電の方がコストも安く魅力的であり、今の地球温暖化にも対応できていることがわかった。しかし、今回の事故を考えると、デメリットがあまりにも大きすぎるため、難しい問題である。どちらにもメリットとデメリットがあるため、そのバランスについてよく考えていかなければならない。これからの時代、発電ということについて大議論がかわされていくと思うが、そのときには、これらの情報を最大限に活用して判断をしたいと思う。(生徒B)

これらのふりかえりからは、原子力発電をめぐる複雑な情勢や利害、それに対する社会の価値判断も多岐にわたっていることを知り、1つの事実から判断してはいけないということに気づいていることがわかる。そして、この問題を解決するための自分なりの考えをもととする気持ちが伝わってくる。

これまでの地理的分野と歴史的分野の学習では、生徒が知識を関連づけ、構造立てしながら社会的事象の意味や意義について多面的・多角的に考察できる力の育成に重点をおいてきた。それらを基盤としながら、中学3年生となる生徒には、社会の問題を解決し、より良い社会をめざそうとする社会参画の力を培いたいと考える。そのためには、他者とかかわり合う学習が不可欠である。個々で考えを深めるプロセスも大切にしながら、学級での学び合いを通じ、自分だけでは気づくことのできなかった視点や主張を知り、みんなで思考を練り上げていく学習を大切にしていきたいと考えている。

(2) 本単元の目標や内容と社会科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本単元は、身近な問題を解決していく中で、社会生活における対立とそれを話し合いにより合意に至ることの重要性、さらにその合意が妥当なものであるかを判断することを通して、「対立と合意」「公正と効率」といった社会の枠組みをとらえ、社会に対する見方・考え方を高めることをねらいとしている。この部分を学習指導要領には、「社会生活における物事の決定の仕方、さまじりの意義について考えさせ、現代社会をとらえる見方や考え方の基礎として、対立と合意、効率と公正などについて理解させる。」とあり、今後の公民の学習をすすめるうえでの政治や経済における原理を理解させる単元である。

私たちは、家族、学校、地域社会などさまざまな社会集団の中で生活し、その中では多様な考え方から多くの対立が生まれている。その対立を話し合いにより解決し、社会生活を円滑にするために互いの合意に基づいてルールをつくって生活している。みんなで合意したものであるからそこには守る義務も生じ、状況に応じて変えていくことも必要である。このような合意に基づくルールにより安心で安全な

生活が営まれていることは社会の不可欠な要素である。しかし、「ルールとはこういうものだ・・・」と、教えるだけでそのような考えが身につく訳ではない。なぜルールが必要なのかという点にまでさかのぼって、問題解決的に学習を積み重ねていくことが必要だと考えている。そして、対立から合意に至りルールがつくられる過程や内容が妥当であるか判断することが社会的な見方や考え方を高めていくことにつながると考える。その際の判断の基準として「公正」と「効率」を用いたい。そのルールができる過程や内容は公正であるかどうかと、社会全体で無駄が少なく利益を上げることができるかの両面から検討する必要がある。「効率」を求めるあまり「公正」を欠くきまりはよくない。しかし、「公正」のみを追求し、「効率」でないきまりも良いきまりとはいえない。「公正」と「効率」が矛盾する場合も少なくないし、それに対する人々の考えは多様である。その多様な考えを調整し、集団としての合意点をどうさぐっていくかが大切だと考える。今回は、生徒たちにとって身近な課題（本単元では「各部活動のルールをめぐる争い」）を事例として取り上げ、その問題を解決するために、生徒たちに主張させ、討論させ、合意形成をはかり、さらにどのような解決が望ましいか話し合わせる。合意を形成するということは、自分の考えを根拠を示しながら相手に分かってもらうように主張し、相手の考えも受け入れて調整する必要がある。よって今回の学習は、社会科部の考える思考力・判断力・表現力を育成することにつながると考える。

(3) 11年間で育てる思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

①学級全員での学び合いに至るまでの構想

第1次では、生徒たちの多様な考えを誘発する教材として、球拾いと片付けをめぐる問題を事例として取り上げる。この事例を教材化するにあたり、生徒から多様な意見が出ることが予想され、「公正」と「効率」の概念がとらえやすく、「公正」と「効率」が対立する状況を生む場面設定をおこなう。概略を述べると、ある架空の中学校野球部での問題である。この部では以前から球拾いと片付けは1年生が行うことになっていたが、この年の新入部員は3人と少なく、今のルールのままだと効率が悪い。そこでこの問題をどうやって解決していくか、部のルールをつくり直すことで考えていく。「ルールづくり」を全面に押し出すのではなく、「球拾いと片付けを誰がどんなふうに負担したほうが良いのだろう」という視点で学習を進めていきたい。生徒を利害の対立する5つの立場に分け、それぞれの立場になり問題解決のためのルールとそのように主張する根拠を各自で考えさせる。さらに、自分と同じ立場のメンバーで話し合いをおこない、考えを深め広げる場面を設定する。次に利害の対立する者で集まり、模擬ミーティングを開き、部活動のルールを考えさせる。そこには、立場や意見の違いから「対立」があるが、自分の意見を伝え、他者の意見を知り、調整を図りながら集団としての「合意形成」の場面を設定する。対立から合意に至る過程を実際に体験し、さらに、「各自が自分の意見を言っていたか」「みんなが納得できるように努力したか」「少数意見にも耳を傾けたか」といった視点から、自分たちの話し合いの様子をふりかえることを通じて、ルールをつくる過程での公正さについて体験的に理解させていく。

②学び合い場面の構想 — 「第2の学び合い」の設定—

第2次では、各グループがつくったルールを学級で発表し合う中で、問題を解決する上で有効なルールについて学級全体で思考を練り上げていき、合意に至ることとそれを守ることの意味、そして一人ひとりがルールをつくる主体者であることに気づかせていく。まずは、各グループがつくったルールを発表し、それを相互に評価し合う。そのルールが利害を調整していく上で有効であるかどうか見極める力をつけると同時に、自分とは違うルールとその根拠を知ることによって、自分の見方に新たな視点を加えたり補強しながら思考を再構成したりする場面とする。これは、教科構想で述べている「第1の学び合い」にあたりとされている。ここで「効率」と「公正」の概念の形成をはかっていく。そして、第2次の2時間目では、前時までに話し合った考えをクラス全体で共有し深める時間としたい。「第1の学び合い」で習得した概念を活用して、状況の変化に応じた新しいルールをつくっていく場面を設定し、ルールをつくる上で何を大切にすることを考えさせる。そして「公正」と「効率」に対する考え方も、一人ひとりの価値観により異なることに気づかせ、それらの合意点を探りながら対立が解決され、社会が動いていることを理解させる。

③学び合い場面での教師のはたらきかけ

学び合い場面では、生徒の思いを引き出ししていく「掘り下げる」はたらきかけをおこなう。なぜそのように考えたのか掘り下げていくことで、意見の対立の背景にある価値観の違いや、あるいは同じ願いなのに考えたルールは違うといった、さまざまな違いに気づかせる。表面的な違いに着目するだけでなく、生徒の思いや価値観を引き出して大切にしながら話し合いをすすめていくことが、他者の考えを大切にする姿勢を培うと考えた。また、一つの視点で話し合いが固執している場合には、別の視点からも考えることができるよう「提案する」はたらきかけを行うことで、生徒の思考を深めたいと考える。いずれにせよ、このように学習をすすめる際には、ふりかえり等を活用し生徒のルールについての認識を教師がとらえ、適切なはたらきかけに生かしていくことが大切だと考える。

2 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は、学級全体の学び合いの場面）
1	問題解決のためのルールをつくらう	1	<ul style="list-style-type: none"> 課題状況の整理 問題解決のためのルールをつくらう(1) 5つの立場に分かれ、それぞれの立場に立ち、気持ちとメリットの両面からルールとその根拠を考える。
		2	<ul style="list-style-type: none"> 問題解決のためのルールをつくらう(2) 利害の対立する者で集まり模擬ミーティングを開き、ルールを考える。(合意形成)
2	良いルールについて考えよう	3	<ul style="list-style-type: none"> 良いルールについて考えよう(1) 各グループが考えたルールを発表し、評価し合い、再度自分の考えを再構成する。 ◇自分とは違う考えを知ること、ルールに対する見方や考え方を深めることができる。
		4	<ul style="list-style-type: none"> 良いルールについて考えよう(2) ◇教師の提示する状況の変化により、「公正」と「効率」の概念を活用して、新しいルールについて再度思考を練り合う学習を通じて、社会に対する見方・考え方を高めることができる。
		5	<ul style="list-style-type: none"> 学習のふりかえりをしよう イメージマップの変化から自分の学習を確認する。

3 学び合いによる思考力・判断力・表現力の評価

学び合いを構想した時間については、下記の評価規準によって、ふりかえりやイメージマップを評価した。とくに「第1の学び合い」と「第2の学び合い」場面は、同一の評価規準を用いて評価することで、「第2の学び合い」の有効性についても検証したいと考えた。ふりかえりにより生徒の認識を教師がとらえることで、学び合い場面におけるはたらきかけに生かした。また、単元の学習を始める前と単元の学習後に、ルールに関するイメージマップをとることで、単元構成に生かすと同時に、生徒自らが前後のイメージマップを比較することで、自分の認識の変容を確認できるようにした。

次	時	学習活動	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	評価基準		
					A	B	C
2	3 4	良いルールについて考えよう。	問題解決のためのルールについて、公正と効率の観点からとらえている。	イメージマップ ふりかえり	ルールについて公正と効率の観点から述べ、多様な考えを調整することの重要性について考えている。	ルールについて公正と効率の観点から述べている。	ルールについて公正と効率の観点から述べていない。

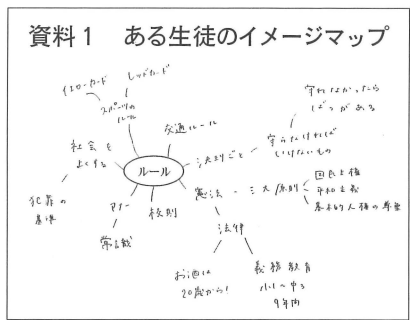
4 授業の実際

(1) 学級全員の学び合いにいたるまでの様子

①単元の学習に入る前の子どもの認識

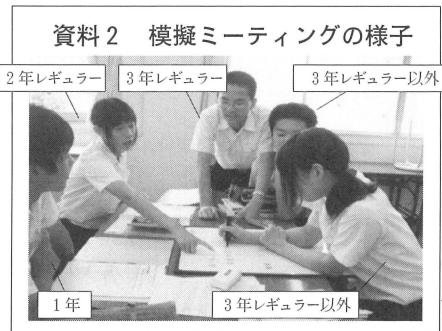
単元の学習の前に、「ルール」から連想する語句をイメージマップにあらわした。次のページの資料1は、ある生徒のイメージマップである。このイメージマップには、ルールから連想するものとして

「やぶると罰がある」「守らなければいけない」「誰かが決める」等の語句が並んでいる。これらからは、ルールというものは既に存在しているもので、このルールを使用するにあたって、「破ってはいけない」「守らなければいけない」という受け身的な意識が感じられる。これは、多くの生徒のイメージマップに見られた傾向である。また、「安心して暮らすために必要なもの」という語句からは、社会生活をおくる上でのルールの必要性を認識してはいるものの、ルールに関して受け身的理解である以上、表面的認識である感が否めない。社会の構成員として、「ルールはつくるもの」「ルールには何が必要なのか」「ルールをつくる上で大切にしないといけないことは何か」等の認識は、この段階ではあまりみられていない。11年間の学びの最終学年となる生徒たちには、「ルールは守るもの」といった認識にとどまらず、問題を解決するためにより有効なルールの在り方を追求しようとする社会参画の力を培いたい。そのための単元構成を考え、学習を進めていくことの大切さをあらためて感じた。

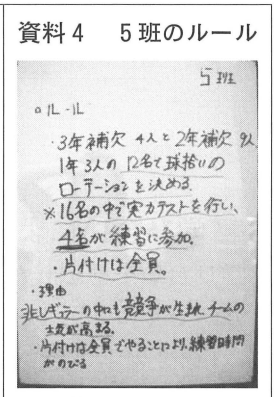
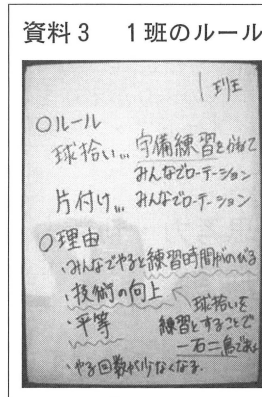


②第1・2時

第1・2時では、生徒を利害の対立する5つの立場に分け、それぞれに問題解決のためのルールを考えさせた。第1時では、同じ立場の者で集まり、自分の考えを深め広げる時間とした。第2時では利害の対立する者で集まり、模擬ミーティングを開き、部活動のルールを考えさせた。そこには、立場や意見の違いから「対立」があるが、自分の意見を伝え、他者の意見を知り、調整を図りながら集団としての「合意形成」の場面を設定する。資料



2は、模擬ミーティングの様子である。利害が対立する状況から合意に至るまでを体験するため、利害が対立する状況を意図的に仕組んだ。対立から合意に至るまでには、ある程度のエゴの表出も必要と考え、それぞれの立場になりきるロールプレイの形をとった。しかし、自分の思いをぶつけるだけでは合意にはいたらない。他者の意見を受け止め、自分の考えを相手にわかってもらえように伝えながら、意見を調整し合意形成をはかっていく必要がある。相手にわかってもらうための根拠として、自分の立場の気持ちと、自分が主張するルールにした場合のメリットの両面から考えさせ主張させた。具体をあげると、「1年生だから球拾いだなんて不公平」「でも、2・3年生も1年のとき球拾いしていたから、不公平ではないよ」「レギュラーじゃないから球拾いだなんて不公平」「試合が近いからレギュラー優先」などの主張がよく聞かれた。これらの主張は、次時の学習の「公正」と「効率」の概念の習得につながるものである。右上の資料3と資料4は、模擬

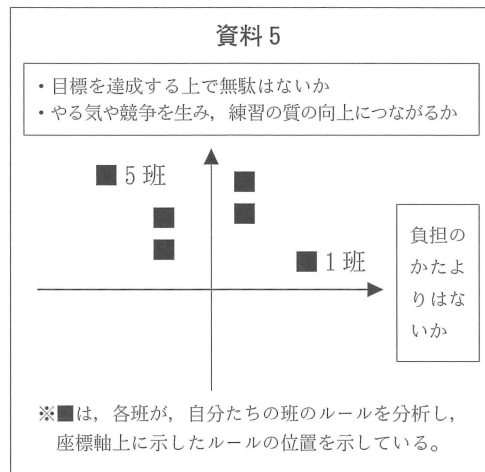


5班は「効率」を重視して決めたものである。

(2) 第3時 - 「第1の学び合い」 -

第3時では、前時までの模擬ミーティングで各グループがつくったルールを発表し学び合う場面を設定することで、ルールに対する見方・考え方を深める時間とした。そのためのでだてとして、次のページの資料5に示した座標軸を用いての発表を行った。この座標軸は横軸に「公正」の要素をおき、縦軸に「効率」の要素をおいたもので、右に行けば行くほど「公正」を重視したものであり、上に行けば行くほど「効率」を重視したものであるといえる。自分たちのつくったルールを分析することで、「公正」を重視すると「効率」とはいえないもの、あるいはその逆もあることに気づき、自分たちがつくったルールについてあらためて考える機会とした。また、他のグループの考えを視覚的にわかり共有できること

が、学び合う場面では重要だと考えた。特に1班と5班のルールは対照的であることを事前にとらえ、1班と5班の考えを学び合いの中心に据えることで、話し合いの論点をしばっていった。1班の「みんなでローテーション」という考えと、5班の「実力テストを実施」という考えを、「なぜそう考えるのか」と掘り下げ、各自の価値観や大切に思っていることを導き出した。すると一見全く違うルールであっても、「部を強くしたい」という思いや願いは同じであることがわかった。「掘り下げる」はたらきかけにより、意見の対立の背景にある価値観の違いや、あるいは、大切に思っていることは同じでも、その実現方法が違うといった、様々な対立に気づかせた。そして、学習の最後に「ルールをつくる上で大切にすることは何だろうか」と問いかけた。以下は、それに対する何人かのふりかえりである。



- レギュラーの練習時間の確保と公平に誰もが順番に球拾いをすることが大切だと思います。いろいろな立場で考えることが違うから、すべてをかなえるのは無理だと思うけど、私は1年生がやらないと2・3年生は文句がでるから、1年生は固定で2・3年生のレギュラー以外のローテにレギュラーも加わるというルールにすると競争意識も高まるかと思いました。(生徒C)
- 私が一番良いと思う考えとしては、やっぱり球拾いはレギュラー以外と1年生でローテーションで行うのがいいと思う。少し不公平な部分もあるが、毎日ではないし、試合に勝つためには、これが一番適していると思う。(生徒D)
- ルールをつくるうえで大切なことは、みんなが納得いくルールを考えること。そのなかで、公正や実力についてなどいろいろなことを考えるべき。(生徒E)

生徒Cと生徒Dのふりかえりからは、問題を解決するためのルールとして、「公正」と「効率」をどのように達成させるべきかを、自分なりに考えようとしていることがうかがえる。生徒Eのふりかえりからは、多様な価値観や考えの違いを踏まえた上で、それらを調整することの大切さに漠然と気づいていることがうかがえる。ただ、まだ今回の野球部の事例にとらわれている。しかし、この単元のねらいは、「対立と合意」「公正と効率」といった社会の枠組みをとらえ、社会に対する見方・考え方を高めることがねらいである。つまり、今回の野球部の事例を通して、社会におけるルールや合意について考えさせたい。それが、今後の公民の学習や実社会で活用できる力につながると考えた。そこで、再度互いの意見を交流させ、深めていくために学び合いの場面をもつことにした。

(3) 第4時 —「第2の学び合い」—

第4時では、状況の変化に応じたルールを再度考えることで、前時の「第1の学び合い」で習得した「公正」と「効率」の概念を活用する場面を設定した。前時までの話し合いをもとに、クラスの意見を1つにまとめた。なお、最初に1つにまとめたねらいは、最も良いルールを決めることではなく、このあとの状況の変化に応じたルールを再度各自で考えるためのものである。よって、少数意見にも配慮し、前時までの多数派の意見をもとに仮設定をおこなった。このクラスで決めたルールは、「1年生は球拾い、2年生のレギュラー以外がローテーションで球拾いにまわる」というもの。しかし、「入部した1年生2人がレギュラーになった」という状況の変化を提示し、今までのルールでいっか、または新しくルールをつくるか、今までの学習をふまえて再度考えさせ、その理由を根拠をもって説明できるように指示した。生徒が考えている間、机間をまわり、具体的に根拠を示せないでいる生徒に対して、「なぜこう考えたのか」個別に考えを引き出し、自分の考えを整理できるよう手助けをした。そして、各自が考えたルールを学級全体で共有し、再度ルールについての考えを深める学び合いの場面を設けた。その際には、対照的な意見や前時までと比べて意見が変わった生徒をとらえ、その意見を中心に学び合いを行った。この時間のねらいは、何が何でもこのルールというふうに、自分の意見を強固なものにすることではない。また、「公正」と「効率」のどちらを重視するのが正しいかを定めるものでもない。ルールを決めるということは合意をすることである。その過程で、自分の意見が正しいと思っていたが、他者の意見を聞いて自分の考えに揺れを感じたり、あるいは意見が変わったりする。また、他者の

意見を受け入れながら、自分の考えに改めて自信をもったであろう。その経験が、今後、他の事象にであったときに、一つの立場だけではなく、他者の立場に立って考えようとしたり、他者の意見を尊重する姿勢を生むと考える。そして、そのような多様な意見や考えの違いを乗り越えて合意したものであるからこそ、それを守ることの重要性にも気づくことができると考える。この時間の最後に、再度「ルールをつくる上で大切にすることは何だろうか」と問いかけた。以下は、それに対する前述の生徒C、生徒D、生徒Eのふりかえりである。

- 同じルールを考えていても一人ひとり違ふし、視点が違うから、ルールをつくることは難しいと思いました。そのために大切なのは、偏った視線で物事を見ないこと、自分の考えが必ずしも正しいわけではないから、人の意見も公平に聞くなどかなと、思います。いろいろな立場で意見が異なるので、周りに気を配りながらまろくおさまるようなルールをつくるのが大切だと思います。(生徒C)
- ルールをつくる上で大切なことは、様々な立場の意見を尊重することがあげられる。しかし、それでは意見がバラバラになって決定できないため、できるだけ多くの人が賛成できて、極端にある立場の人が有利になったり不利になったりする
ことのない考えを選ぶべきだと感じる。完璧な答え、誰もが全部納得できる答えはないけど、最初はみんなで話し合うことが大事だと思う。(生徒D)
- ルールをつくるうえで大切な事は、いろいろな立場になって考えることだと思います。ルールを決めることで納得する人と納得しない人が出てくるかもしれませんが、いろいろな立場になって考えることで少しでも不満が減り、平等に近づくルールができると思います。今日の学習を通して、私が考えつかないような意見がでてきたり、様々な意見を聞いて自分の考えをはっきりさせるよい機会となりました。(生徒E)

第3時と第4時では、同じ学習活動を繰り返したように感じられるが、ふりかえりや資料6からは、「第1の学び合い」後と「第2の学び合い」後での、生徒の認識の深まりの差が見てとれる。それは「第1の学び合い」で、自分の考えをしっかりとち、その状態で再度学び合ったためだと考える。それぞれの主張が根拠をもちしっかりとちたものであればあるほど、合意をすることの難しさや、多様な考えを調整することの重要性に気づくことができたと考える。

資料6 学び合いによる生徒の認識の変容

※前述の評価基準に沿って評価したものの

	A	B	C
「第1の学び合い」の後	13%	75%	12%
「第2の学び合い」の後	58%	42%	0%

対象学級の生徒数は34名。2名欠席。

そして、多くの生徒がすでに野球部の事例にとらわれず、社会におけるルールについて考えることで、社会に対する見方・考え方が高まった様子がうかがえる。今後は、今回の学習で身につけたことを、政治や経済分野、あるいは地域社会や日本、世界の問題へと活用の幅を広げていくことが大切だと考える。

5 成果と課題

(1) 成果

今回の教材は、公民分野の導入単元にあたり、ここで身につけた見方・考え方を今後の学習に活用していくことを期待するものである。よって、「ルールとは○○○だ」「合意をするうえでは□□□を大切にしないといけない」と教えるだけでは活用できる力になることは難しい。生徒自らが、学習を通して実感し、生徒自身の言葉として語られなくてはならないと考える。生徒のふりかえりや資料6からは、それがある程度達成できたと考え。それは、学び合いにより自分の考えを深め再構成した状態で、再度学び合いを行ったことが有効であったと考える。また、明確な評価基準を設けて、生徒の認識を教師がとらえた上で「掘り下げる」はたらきかけを行うことで、表面的な違いだけでなくその背景にある価値観や願いを大切に学習することができた。

(2) 課題

今回の学習では、「対立と合意」「公正と効率」といった社会の枠組みをとらえ、社会に対する見方・考え方を高めることをねらいとしていた。そのような場合、多面的・多角的に考察し、判断し、さらにその判断が妥当なものであるかどうかを吟味する課題設定と、より複数の立場に立って思考を練り直す単元構成の工夫が一層必要だと感じた。また、価値が対立する場面を喚起できる生徒の考えや、発言をとらえ学習場面に生かすために、はたらきかけの方法やタイミング、そして評価の方法をさらに追求していく必要性を感じた。

(文責 前島 美佐江)